

I can speak

太宰治

青空文庫

くるしきは、忍従の夜。あきらめの朝。この世とは、あきらめの努めか。わびしさの堪えか。わかさ、かくて、日に虫食われゆき、仕合せも、陋巷ろうこうの内に、見つけし、となむ。

わが歌、声を失い、しばらく東京で無為徒食して、そのうちに、何か、歌でなく、謂いわば「生活のつぶやき」とでもいったようなものを、ぼそぼそ書きはじめて、自分の文学のすすむべき路みちすこしずつ、そのおのれの作品に依って知らされ、ま、こんなところかな？ と多少、自信に似たものを得て、まえから腹案していた長い小説に取りかかった。

昨年、九月、甲州の御坂峠頂上の天下茶屋みさかという茶店の二階を

借りて、そこで少しずつ、その仕事をすすめて、どうやら百枚ちかくなつて、読みかえしてみても、そんなに悪い出来ではない。

あたらしく力を得て、とにかくこれを完成させぬうちは、東京へ帰るまい、と御坂みさかの木枯こがらしつよい日に、勝手にひとりで約束した。

ばかな約束をしたものである。九月、十月、十一月、御坂の寒気堪えがたくなつた。あのころは、心細い夜がつづいた。どうしようかと、さんざ迷つた。自分で勝手に、自分に約束して、いまさら、それを破れず、東京へ飛んで帰りたくても、何かそれは破戒のような気がして、峠のうえで、途方に暮れた。甲府へ降りようと思つた。甲府なら、東京よりも温いほどで、この冬も大丈夫すごせると思つた。

甲府へ降りた。たすかった。変なせきが出なくなった。甲府のまちはずれの下宿屋、日当りのいい一部屋かりて、机にむかつて坐つてみて、よかつたと思つた。また、少しずつ仕事をすすめた。おひるごろから、ひとりでぼそぼそ仕事をしていると、わかい女の合唱が聞えて来る。私はペンを休めて、耳傾ける。下宿と小路ひとつ距^{へだ}て製糸工場が在るのだ。その女工さんたちが、作業しながら、唄うのだ。なかにひとつ、際立つていい声が在つて、そいつがリードして唄うのだ。鶏群の一^{いっかく}鶴、そんな感じだ。いい声だな、と思う。お礼を言いたいとさえ思つた。工場の堀^{へい}をよじのぼつて、その声の主を、ひとめ見たいとさえ思つた。

ここにひとり、わびしい男がいて、毎日毎日あなたの唄で、ど

んなに救われているかわからない、あなたは、それをご存じない、あなたは私を、私の仕事を、どんなに、けなげに、はげまして呉くれたか、私は、しんからお礼を言いたい。そんなことを書き散らして、工場の窓から、投なげ文ぶみしようかとも思つた。

けれども、そんなこととして、あの女工さん、おどろき、おそれてふつと声を失つたら、これは困る。無心の唄を、私のお礼が、かえつて濁らせるようなことがあつては、罪悪である。私は、ひとりでやきもきしていた。

恋、かも知れなかつた。二月、寒いしずかな夜である。工場的小路で、酔漢の荒い言葉が、突然起つた。私は、耳をすました。

——ば、ばかにするなよ。何がおかしいんだ。たまに酒を呑ん

だからって、おらあ笑われるような覚えは無^ねえ。I can speak English. おれは、夜学へ行ってんだよ。姉さん知ってるかい？ 知らねえだろう。おふくろにも内緒で、こつそり夜学へかよっているんだ。偉くならなければ、いけないからな。姉さん、何がおかしいんだ。何を、そんなに笑うんだ。こう、姉さん。おらあな、いまに出征するんだ。そのときは、おどろくなよ。のんだくれの弟だって、人なみの働きはできるさ。嘘だよ、まだ出征とは、きまつてねえのだ。けども、さ、I can speak English. Can you speak English? Yes, I can. いいなあ、英語って奴は。姉さん、はつきり言つて呉れ、おらあ、いい子だな、な、いい子だろう？ おふくろなんて、なんにも判りやしないのだ。……

私は、障子を少しあけて、小路を見おろす。はじめ、白梅かと思つた。ちがつた。その弟の白いレンコオトだつた。

季節はずれのそのレンコオトを着て、弟は寒そうに、工場の塀にひたと脊中せなかをくつつけて立っていて、その塀の上の、工場の窓から、ひとりの女工さんが、上半身乗り出し、酔つた弟を、見つめている。

月が出ていたけれど、その弟の顔も、女工さんの顔も、はつきりとは見えなかつた。姉の顔は、まるく、ほの白く、笑つていようである。弟の顔は、黒く、まだ幼い感じであつた。I can speak というその酔漢の英語が、くるしいくらい私を撃つた。はじめに言葉ありき。よろずのもの、これに抛りて成る。ふっと私は、

忘れた歌を思い出したような気がした。たあいなない風景ではあつたが、けれども、私には忘れがたい。

あの夜の女工さんは、あのいい声のひとであるか、どうかは、それは、知らない。ちがうだろうね。

（「若草」昭和十四年二月号）

青空文庫情報

底本：「新樹の言葉」新潮文庫、新潮社

1982（昭和57）年7月25日発行

初出：「若草」

1939（昭和14）年2月号

入力：土屋隆

校正：鈴木厚司

2005年10月12日作成

2016年2月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

I can speak

太宰治

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>